総合討議の総括

統一テーマ「ロマンス諸語における限定詞・関係詞」

福嶌教隆（とりまとめ）

1．はじめに

日本ロマンス語学会第56回大会（2018年5月12～13日、於京都大学）の統一テーマは「ロマンス諸語における限定詞・関係詞」であった。統一テーマの研究発表は初日（5月12日）に実施され、ポルトガル語、スペイン語、オック語、ラディン語に関する4件の発表（各々持ち時間20分）があった。続いて出席者全員による総合討議（パネルディスカッション、60分）が行われた。以下に各々の発表要旨と総合討議で出された質問・提案のいくつかを記す。

2．研究発表と総合討議

（1）鳥越慎太郎、蔦原亮「ポルトガル語の -dor, -nte 形容詞の関係的用法 —スペイン語との対照—」

［発表の要旨］

-dor, -nte という接尾辞を持つ形容詞は、un hombre fumador（煙草を吸う人、喫煙者）、un fármaco calmante（痛みを和らげる薬、鎮静剤）（例はいずれもスペイン語）のように、被修飾語が行う行為を表す用法を持つ。これを本発表では「主語的用法」と呼ぶ。

一方、ポルトガル語の efeito inhibidor, スペイン語の efecto inhibidor はともに「抑制効果」、即ち「A が B を抑制する（という）効果」を意味する。また、ポルトガル語の efeito relaxante, スペイン語の efecto relajante はともに「リラックス効果」、即ち「A が B をリラックスさせる（という）効果」を意味する。ここでは名詞とそれを修飾する形容詞は同格の関係にある。これを本発表では「関係的用法」と呼び、研究対象とする。

「主語的用法」はロマンス諸語に広く存在するが、「関係的用法」はイベロロマンス語においてのみ生産的に用いられると言われている。本発表では、ポルトガル語における「関係的用法」はスペイン語の同用法の影響を受けて用いられるようになったのではないかという提案を行った。その根拠としては、第1に、両言語における「関係的用法」に現れる名詞、形容詞、およびその組み合わせに大きな共通性が認められること、第2に、ポルトガル語の同用法の出現時期がスペイン語よりも遅いことをあげることができる。

［総合討議］

まず、-dor と -nte を同質の接辞として扱ってよいのか、-dero についてはどう考えるか、という質問が出た。また、この現象はカタロニア語を考慮して議論すべきであるとの提案

がなされた。さらに、「スペイン語がポルトガル語に影響を与えた」という説明の妥当性についても質問があった。これらの問題を巡って討議が行われた。

（2）喜多田敏嵩「スペイン語における前置詞後続名詞の数・定性 —名詞の現働化による7前置詞のクラスタリング—」

［発表の要旨］

スペイン語の前置詞 con, de, en, desde, para, por, sobre を、これらに後続する名詞と現働化詞との共起頻度を基準として、クラスタリング（集合を部分集合に切り分けること）を試みる。現働化（actualización）とは、名詞が現実の指示対象を持ち、文の統語機能を果たすようになることを意味し、現働化を促す形態素（複数語尾 -s、限定詞など）を現働化詞と呼ぶ。即ち、前置詞に後続する名詞が単数形で現れる事例および限定詞を伴わない事例の頻度を基準に、前置詞を分類するのである。

スペイン語コーパス esTenTen 11 を使用してこの調査を実施した結果、次のようなクラスタリングを提案する。

クラスター１：[[[por, con] de] en] -------- 現働化を求めにくい。

クラスター２：[[sobre, desde] para] ------ 現働化を求めやすい。空間の前置詞としての有標性・具体性を有する。

［総合討議］

限定詞の有無や単数形・複数形の違いだけでなく、名詞が具体名詞か抽象名詞かなどの要因も考慮してはどうかという提案があった。変数の導き方など、データの処理方法についての質問もあった。また、今後の研究の展望についても質問が出た。これらの問題を巡って活発な討議が行われた。

（3）多賀吉隆「オック語における多機能の関係詞 que をめぐって」

［発表の要旨］

オック語の que にはさまざまな機能があるが、構文中におけるふるまいは、十分解明されているとは言えない。本発表は、この問題について『星の王子さま』のラングドック方言、プロヴァンス方言、ガスコーニュ方言訳を資料として行った予備的研究である。

ロマンス諸語では、関係節中に再録代名詞（resumptive pronoun）を用いる用法は非標準的とされることが多い。しかしオック語ではこの用法が「烙印化（stigmatized）」されておらず、それが que の機能を一層多様化している。本発表では、再録代名詞の存在を手がかりに、que を用いた関係節を分析した結果、「再録代名詞が用いられる場合は que を補文標識とみなし、主格・対格で再録代名詞を欠く場合は que を関係代名詞とみなす」という提案を行う。

［総合討議］

イタリア語、スペイン語、サルデーニャ語、中世オック語における再録代名詞の用法について、各言語の研究者から意見が出た。スペイン語においては、与格の疑問詞が再録代名詞を伴う場合があることや、関係形容詞 cuyo に代えて「que＋ 所有形容詞 su」を用いる quesuísmo と呼ばれる俗用があることが紹介された。この討議により、オック語の que を起点に、さまざまな問題へと展開の可能性があることが示唆された。

（4）山本真司「疑問詞と関係詞の相互乗り入れの問題：ボルツァーノ県のラディン語の場合（フリウリ語と比較対照しつつ）」

［発表の要旨］

発表者は、第 47 回大会（2009 年、於北海道大学）において以下のように述べた：フリウリ語では、基本的には、cemût (疑問) ～ come (非疑問) という区別があるにもかかわらず、方言によっては、cemût [che] が関係詞の領域に、あるいはその反対方向に come [che] が疑問の領域にまで、「相互乗り入れ」する。

意味・機能	どのように (直接疑問)	どのように (間接疑問)	のように (関係詞)	のように
形	cemût	cemût che come che	cemût che come che	come, come che

今回は、北イタリアの様々な言語に似たような現象が見られることに着目し、考察を行う。一例として、ボルツァーノ県のラディン諸語を取り上げると、次のようになる。

ラディン諸語	どのように (直接疑問)	どのように (間接疑問)	のように (関係詞)	のように
マレッベ方言	co	coche	desche (desco)	desche (desco)
バディア方言	co	sciöche	sciöche	sciöche
ガルデーナ方言	co	coche	sciche coche	sciche coche

マレッベ方言では、疑問が co、非疑問が desche という区別が、比較的忠実に守られているが、それにも関わらず、関係詞として coche を使うのもそれほど悪くない、と感じる話者もいる。バディーア方言では、本来は非疑問の意味のはずの sciöche が、間接的疑問の領域をも受け持っている。ガルデーナ方言では、本来は疑問の意味のはずの coche が、関係詞としても使われることが普通で、それのみならず、(sciche を押しのけて)「のように」の意味一般で用いられる傾向が強い。

［総合討議］

残念ながら十分な討議がなされたとは言えないが、本発表は、ロマンス語の疑問詞、関係詞、接続詞の境界を探る手がかりとなる興味深い言語事象の記述であり、今後議論を深めていくことが望まれる。

3．まとめ

以上のように、4件の研究発表のうち（1）は形容詞の「関係」的用法を扱い、（2）は限定詞の有無に関する問題に触れる論考である。（3）と（4）は関係詞を直接の対象とした研究である。これらの発表は「ロマンス諸語における限定詞・関係詞」という大きなテーマの一端に焦点を当て、問題についての仮説や、有益な情報を提示し、参加者の討議の契機となった。このうち（2）を元に書かれた論文が本号に掲載されている。

前年度の総会で最多の支持を得て選ばれたテーマでありながら、研究発表の数がやや物足りなかった。特に限定詞を正面から論じた考察がなかったのが惜しまれる。近い将来に再度これらの問題を統一テーマとして取り上げ、さらに議論を深めることも考えられよう。